塵芥集

異邦人の中に住む我等の耳には
陽人の声の中に悪魔の誘惑
子なれど
我懐より陽出る良心の響の中
に八神の教まるを感ぜん

矢崎探義作

本間文庫
文庫 14
A 153

塵芥集の自序

塵芥集とハ、其字の語る如く塵芥の集といふ事なり、和訓ふ塵ハちりなり、芥ハあくたなりとあり、拙き我詩歌ハ塵芥の如きものなれバ甫ハ名づけぬ、又いろは歌留多を案じるみ「ちりつもりて山となる」といふ事なり、余ハ此数説の中ふ大なる教訓を讀みぬれど、如何ゝせん我力ハ微なり、我詩歌の塵ハ、集むるゝ倒底山を成さじ、

僅か芥を成し得るのみ、されば塵つもりて
芥となり、芥数じて塵となる、是ぞ我詩
歌の運命なりて、迎へ此間を抽出づる
事能はざれば、此好みの塵芥集と
名づけぬと云いわ者ハ

昭和四年の春

嵯峨の屋の主人
矢崎探美識

塵芥集

第一　厭世時代の詩

矢崎探美作

山里ハ世を遁れて
花の影ふたつ塵を
避てかくるゝ　山里の
伏屋の軒ハ月清し
心の垢の煩悩を
月の光のさやけきハ
洗へバ清し我思ひ

功名富貴世の中の
人の望を一睡の
夢ゐ見なして世を忍ぶ
浪の狂を誰か知る

嗚呼天ゐ望の星流を
地上の花の散てゆく
神の秘密の運命
現ハつらきゆゑかな、

淺間の森の嵐よ
何を怒りて呼び泣く
杉の木の間の夕月よ
何を憂へて影細き
塵の浮世を棄し身ぞ

山里の春の曙

身おのりわしる世の塵を
避てかくるゝ山里の

有明をしら春の曙
庭ふ来て啼く鶯の
声もやさしや宮の梅
一輪つめばはろ〳〵と
袖ふこぼれて風ぐほる

暁の夢

夢うつゝうつゝの夢や
なき人を面影ふ見ぬ
今昔感寛の恋ふ

有明の影ぞ寒けき

花ハ咲き花ハ散れども
月ハ照り月ハ曇れど
ひとり居の感寛の床ふ
暁の鏡ぞひやゝかふ

畑の細道

霜白き畑の細道
月を待ふて影ふみゆけバ

野寺の鐘霧ふかく籠りて
いさ川流静けく
幻の夢子山野を行つ

白髪翁

散てかく
見が果の春を
うき世の秋の
あしゝゝ夕の

花の蔭み
消ぬきて
身かぞしむ
風寒し

山をも抜く
力も今ハ
猫をも折く
血氣も今ハ

いにしへの
衰へて
古の
影もなし

世を秋風の
黒髪の
恋故燃し
空しく燃て

髪をふきて
雪とかはれバ
胸の火も
消ぬけり

闇の悪魔の
ひとへの夢と
苦や嘆や
心の海の

甲斐なき者ハ
明るのうきを
今の憂しみ
何を待とて

わ辺よ来て
なぐろかせバ
みよれ〜て
涙をあぐ

老の身よ
送りてハ
迎へつゝ
世ハ住む

嗚呼悲命
人の身の業
一生を
月影の
何を悔て迎

打よ
ふるへ
世の鞭

そをしも知らじ
そをしも知らじ
俄みくらして
傾むく今
身を恨む

煩悩の犬
断奈の剣
切掛ひて

いざ勧まん　神の御恵

山蔭の翁

山蔭の
浦波の
板びさし
葺はふ
うき世ふ
冷まさる
鐘ゝと

はゝらの小家を
浮世の嵯峨と
月を慕ふ。
窓を開けば
物思ふとや
野寺の鐘
無常を告る

はら〳〵と
時雨かと
からころも
ながらつて
ふり注ぐ
数物の
あし音を
すみ渡る
語らひし
木枯の

落る木葉を
嵐の問ば
うつ音と聞く
世をば思へば
涙の雨の
袖を朽ぬく
泡の語らん
月の問て
友ハと問へば
男ゝと答ふ

鳴る
契りし
暮むせる
あい恵命

雁を呼びて
人ハと問へば
墓の下といふ
一夢なりけり

大久保村の夕暮

夕日の西に傾けば
枯野を渡る風寒く
尾花ハ雪を散しけり
野寺の鐘のいと寂て

里の夕をみとをつバ
鳥も森に帰りけり
静ハ里の夕暮欤
彼方に見ゆる小径をバ
村つゝめの頼ひつれ
家路をさして帰りゆく
自然ハ村の夕暮欤
彼方に見ゆる岡の辺の
賤が家にて焚く煙
森をかすめて立昇る

此処の哀れ賤の男が
肌さへ寒きつづれ着て
家尊や家母の為めとて
森の落葉を拾ふなり
柿を拾ふ山風よ
心しらでふけ賤の男が
いろ〳〵衣の袂をば
さらぬ色なし男子あれば

遠磨の像の題に

月影氷る草の庵の
磴の向ひて自眼を
開くは影如人の身如
片敷く衣の風ふきて
面影寒し禪僧の

奇しきは人の心かな
彼の眼を開きなば
天地彼の前にあり
彼の眼を閉しなば

天地彼の心を蔵つ

来れ禅僧世の為め
世の間生死造化の理
世の間は人知天地の秘
汝の答へ黙示せり
世の黙示は秘密なり

鳴呼未来永却世の秘密
天地の耳を欺てば

横と拂ふ夜嵐の
何処より吹来て何処へ吹去る

第二 俗化時代の歌

露を惜む

朝貞の

葉末ふやどる露の玉
そよ吹く風をかくさきみて
けぬ間を歎む命かな
庭ふたもむるわさな見よ
池がもぎどうな袂をバ
かごと計り葉末ふれなな

ふれなバ露の玉と散る

物思ひ

さみだれの
晴間をまつの月かけて
ひとりくよ〳〵物思ふ
恋ぞ心のみだれなる

山寺の鐘も無常の音さへて

此処も浮世ぬけぬぎれ
君をこひしと泣いてゐく

恋

恋故ゆ[illegible]
やつるゝ影を春の夜の
月ゆうつしてなげくかな

昔思へバ陰氏の君の
脱月殺ゆあゴりかれし
古き例もあるものを

人の心も知梅の
香をバ慕ひてこがれよる
我身ハ淋か関すへし
つれなき人の心かわ

まつ恋ニ枕

来ぬ人を
待ハつれなき山ぬふべのな
流つる木葉の時雨をも
もしやそれかと思の辯

そッと思人で窓の戸開りわ
さし入る月の影きよく
あれ恥かしい我姿

今宵をと言ひしをカ
待わ来ぬとハ偽りな
月ハ更ゆく閨の中
せ心のくよ〳〵と
悲し、つれなし、獨寝の
床ハ寝覚のうき思ひ

恋び寄る恋

恋ぶるハ

園にそよげる梅の花
香をバ慕ひてこがれよる
そゝと窓の戸相園をれれバ
月おやさしき玉塔の
明てゆつりの顔と顔
こぼす笑ひの愛敬ハ
露郎命郎、紙恋郎

逢ふ恋

可愛やとしめて寝し
其一言が命みて
ぞゝと身ふしむ嬉しさの
月の花床のさゞめごと
驪山の昔しのばるゝ
その下紐のほどけしと

後朝の恋二種

山の端の

白ひはいやよ明の鐘
秋の夜長をめしみ達ふ
夢の間おしき睦語の
契短きうきをうれ
つとろ語も惜るとのを
あれ意地をるな鳥の声

ありぬ契ふ短夜の
明るはいやよ山の端ふ
しろ〳〵移る夏月

とろ後朝の今れかい芙
あれ寒山寺の鐘さ声
これ今ずし波のあるるあと
神とめて

伊とのさき

白雪の
袖ふつをるハ掛つハ蔵る
顔ふぬられし此泥ハ
迷へど蔵ぬ身の無念

腰のかたなをぬいさくぬと
ふりくる雨もいとひなく
日本堤のねふ闇ふ
なくや皐月の時雨
待つとかけし一声ふ
宿を乱れや電の
剣の光ゆとやきき

杜鵑ふ雲れん
ほとぎれん

何を恨みて世をば啼く
雨さみだるゝ闇の夜ふ
夢をゝ結ぶ世の人の
胸いさましむ有とそ知
なく音ゆしるる私ハ
白き卯の花如ゆそ偲む

新義人

春ゆけばのゝ東山
霞たなびく夕朝

流れ清き加茂川の
水で洗ひ出す二筆の
肌膚清しき玄義人
茶筅が深みの緑の端
柱ふれ流れ上ぼりと
明るく空を眺め居る

珍の雪の肌とけて
梅が香ぬる顔の艶
さと流の目ゐ向るか

眉のあたりハ月くもる
雨を惜しむ利休花一枝
鬢のほつれハ誰が罪ぞ

もふべの口舌のむせばれて
君をいとしむ今朝せる歌
君が恋ゝを見送りて
思ふ思ひの微笑ひ
為故ゝ泣き恋故笑ひ
世間ゝ恋を命の玄義人

空を見挙し目の中あり
我いとゝけり其心

和三、過渡時代の詩

荒野の曙

東雲ゝ殘月消て
朝風ゝ霧の晴れバ
面白し千里の平野
蓬枯て風寒く
人跡絶えて霜白し

山より左手ゝ遥耳ゆ

杉あり巓ふ長い
鷲あり天空を舞わ
大なる哉砂漠の眺
天高く地ひろし

帰郷（関東辺の武士が陸奥辺の征伐おわりて
久しく家郷の音信絶しける後久にみて
我家を訪る時をもと想像して作る）

駒とめてふりさけ見れば
月影さむく草野に落て

霜を胚む霧白々と
今来し里ハ何処ぞや
千里のはてを見え分ぬ

草の根方に捨ぶ蟋
駒の蹄のあけさせて
昨日ハ鞭をあぐれバ
雲故郷も如夢々と
征衣の袖に花ぞ散る

嬉しかも故郷の山も見ぬ
あら恋しのわさきの時よ
あの山のあなたをおこそ
我の生れし村は何こなり
我の育ちし家は何こなり

思へば六年のその昔
母上のかど辺を立ちて
家の露月をうらへつつ
送りまゐらせし面影の

今もなほ我目の前に
嬉しく今昔ぞ見えんとは
神せらで知るよしくるは
母上は千里のはてに
我ありと思ひ思ひをびつつ
我上をかは思ひとぶらん
あら恋しの母上よ

月影に駒を駆りて

蹄よ山路の雲をつらめば
森の木の間の夕月影を
神坂、賤坂、彦物坂
猿猴鳴く声いと悪し

暮けはしき復の
蹄を立て休らへば
木枯さつと吹とし来て
散る小木葉坂村雨坂
駒のたてがみ梳る

嬉しや我家の森を見ぬ
いざや急ぐ我家よ
鞭を揮て峠をくだれば
早くも来けり村時雨
あれや我家の棟を見ぬ

土橋の水に照る月の
影もさびしくさむしろを
氷る夜寒よ天高く
砧の音の木精しるべ

誰がわらぶき家の方よりぞ

軍営秋の夜

上村諫信の漢詩の意譯

鋒とりて顧望しれば
雲白く軍営を満て
天高く風寒し
丁形行営を過れば

声悲しく山城に流て
月清く夜静なり

越の山脈の景
今ぞ今世と我望とをんな
面白し男児の業

さも何らばあれ今世のあるを
遠征の人を思ふらん
ふる郷人の心わもへば

蝦夷の宿屋の夕暮

春尚若きその夕暮
蝦夷の宿屋お出立てば
胡砂吹く風の寒くして
潮ハ高し雲早し

夏の夕の雷を
招く波磯の花波ハ
冬の朝の白雪を

散し波の白沫ハ

岡の昇る春の月
海越ゆる岡より浦伝ひ
月を波うや波の花
月を蒼ずや雲の波

そと波との間より
岡をとゝ昇る月
そ[illegible]ば海暗く

波河を出る春の月
村雲の蔭のみわたる
波ハ波ひめそ河の月
そハ青ぬ波河の月
紀き

波間なれば影遠かれ

析しもかれぬ白鳥の
翼か月をかくめつて
もゝよ翔りつ波間を舞ひつ
泣めく鳥よ月寒し

遠

嗚呼臥牛山頭をうづまくハ
雨のかしら吹月の夜
碧血碑辺松吟じうハ

旅魂咽ぶ吹春の暮

若草頭より北を望めバ
千里の雪砂月高く
霧よりうれゆく山素遠く
白波寄れる荒磯を
胡人月をバ背ひつつ
馬を牧ひてぞ泣めく

冬の夜の野道

プウシキンの詩を訳したるもの

天の涯立つ夕霧を
洩れ出る月の寒けくも
野末の氷る雪の上
しろじろ落る影哀れ

さびしき光の野道とぶ
勢猛き馬車かれば
とはちの里の本籍しる
鈴の音さへて夜ハ静か

何を欲いしたむ所者の歌
節も哀れ
祖き調のなつかしくハ
恵耶、怨耶、恋耶、哀歌

燈火の影もかぶの影も
絶えて八雲数さびしき歌
ひゝふるゆゑの八一條の
うもれもの
めける地道のみ

かるみ

散てなく
花一片の命かな
造化の力こゝにとゞめと
思へば愛のまさらむ。

捨てある
五古一枚の跡なれど
五のまごころ籠りめと
思へば愛のまさらむ。
うつろはぬ

花の昨日を思ひてハ
亡五の身の思ばれて
盛なる
五の昔を慕ひてハ
昨日の花の思ばれて
かりそめの
書棄ながらなきの
遺物となりし五古一枚
涙の種となりゐけるかな

造化の神

造化の神ハ無窮なり
無窮の靈ハ光なり
光の命ハ力なり
無窮、精靈、精力、
命ハ燃ゆる天地の
其源ハ神ハこそあれ

天ハてる日を造りてハ
世を公等ハ照さしむ

神の恵のいやふかき
千尋の海も深からば

宇宙ハ水を造りてハ
地の美、有ようそがしむ
造化の德のいや高き
富士の所山も高からば

一穂の稲も所力ハ
よらでハ何で成ならるべき

一燈の火も所かゝ
よらでは何で燃ゆるぞ（き）

天ふきぬき雨ふるも
海の風ふき波立つも
世を爽快ゝ
神の力の御蔭なれ

神は諸てゝ在せど
宝坐は高き天ゝして

其処は真の自由なり
そこゝは真の平等なり

翼を賜へ（我神よ）
混の心よ
来よと呼さゝ天使の
声は我身の命ゝ
慕ふこゝ世の天の王國

救世主の画像ゝ對して

我等の主なるイエス君よ
世に捧し燈火を
我今此処に打消しぬ
我等の主なるイエス君よ
世の賜ひし所教の
聖書を我今閉じしうり

されど天なる世の光
尚永遠に輝き燃ゆ
されど無限の世の世界

尚目の前に死かるる
我等の主なるイエス君よ
安きをしまし弱き身に
外面に覚さるぐ夜も
輝く所面輝ひ時

罪の世界はいさづらに
世に怒りて互ひきみき
罪の世界はいさづらに

世を死罷る定めおき

前の冠着くまるも
十字架に掛られまひしも
世に静かに安らかなる
死に到る迄他の存
世の祈を絶ざりき

我等の主なる上天君よ
安きをとこそ（弱き我に）

外面は嵐さびぐ夜も
輝く内面はかがむ時